3 これからの大山街道の街なみ形成の考え方

かつての街なみの工夫と、現代の街なみづくりへの継承

建物が密集した宿場町の街なみには、多くの人が公の空間を共有し、良好な環境をつくるための工夫がたくさんありました。

町家は、横方向に間口を狭くし、高さ方向には軒を設けて分節化することで、人のスケール感に合った※街なみを構成していました。街道に対しては建物の壁面位置を揃え、窓に格子をはめるなど、街なみを整える工夫も行なわれており、また、街道に面する部分には、公私の中間となる土間などのもてなしの空間が設けられ、街道に憩いの空間をつくることに貢献していました。街道やその周辺には、適度なオープンスペースや緑の空間も存在していました。

このように、かつての大山街道には、賑わいがあり、人のスケール感にあった街なみをつくるための時代を貫いて共通する知恵がありました。これらを現代の「大山街道らしい」街なみづくりへと継承していきます。

※　人のスケール感に合う：人の感覚にあった程良い規模や大きさになっていること。

これからの大山街道の街なみ形成の方向性

現在の大山街道の特徴や課題と、かつての街なみから継承すべき要素を重ね合わせることによって、これからの大山街道の街なみ形成の方向性を、以下のとおり、とりまとめます。

宿場町から受け継ぐ、人のスケール感に合った街なみの形成

かつての溝口宿、二子宿は、人のスケール感に合った低層の街なみが続いていました。

高層建築が建ち並ぶ現代においても、宿場町から受け継いだ街なみ形成のアイディアや工夫により、人のスケール感に合った街なみを目指します。

良好な都市環境の形成

宿場町の時代から短冊状の地割りで建物が建ち並んでいた大山街道では、公私の境界の作り方や採光の取り方など、密集した都市空間において良好な環境を形成するための様々な工夫がありました。

これらの考え方を継承し、現代の街なみにおいても工夫を行ない、良好な都市環境の形成を目指します。

人が行き交う、もてなしと賑わいの空間が連続する街なみ形成

かつての大山街道は宿場町として賑わっていました。これらの街なみの賑わいは、主として１階部分のしつらえによってつくられます。街の賑わいを現代、未来に継承するために建物の１階の部分に賑わいの空間をつくり、それらが連続する街なみを目指します。

安全に歩ける歩行空間の確保

現在の大山街道の幅員は約７メートルと狭いですが、交通量は非常に多く、一部はバス通りになっており、歩行者にとって歩きにくい道です。そのため、街なみ形成においても安全に歩ける歩行空間の確保が重要です。

街道に緑が連なる街なみ形成

かつての大山街道は、町家が連なる都市的な街なみに混じって田畑などの緑の景観もありました。現在でも、大山街道周辺には、多摩川の河川敷や多摩の里山と呼ばれる崖地、宗隆寺の緑地など固まった緑も多く残っています。これからの大山街道においても緑化を推進し、これらの緑地と連続した緑豊かな街なみを目指します。

街なみ作法の考え方

大山街道では、現代的な街なみの魅力を高めながら、その中に、かつての歴史的な街道における街なみづくりの精神（和の心）を取り入れることにより、魅力的な街なみを目指したいと考えています。

大山街道らしさを " 現代的な魅力 " と歴史性からくる " 和の心 " の両面からつくるため、「基本の作法」と「応用の作法」を設けます。

現代の街なみの魅力を高めるための基本の作法

マンションや事務所などの現代的な建築でも、低層部の高さや間口を分節化して、人のスケール感に合った街なみをつくったり、低層部にもてなしと賑わいを感じさせる空間を設けることなどにより、かつての宿場町のような憩いや賑わいの空間が連続する街なみをつくることができます。

＋

和の街なみを意識した応用の作法

建物の外壁に和の素材を想起させる落ち着いた色彩を使ったり、低層部の外壁の表面に、伝統工法の軸組をイメージしたようなフレームのデザインを取り入れたり、手すりや開口部に縦格子を用いたデザインを取り入れて建物のデザインを整えたりすることによって、和の知恵を活かした秩序ある街なみづくりを行うことができます。